

図書館通信

103

1993. 3

新入生 特別号

★
大学に入ったら・・・

不良教員の誓い

偶感思考

読書とデート

学生とテスト

ある聖書“木を植えた人”について

図書館利用の今昔

“私の”図書館

図書館と上手につきあうために

石田 俊正 1

根本 猛 2

諏訪田 清 2

村越 真 3

宮川 達夫 4

大村 寛 5

竹内 浩昭 6

佐藤麻記子 6

加藤 健 7

Shizuoka

University

Library

新入生
特別号

大学に入ったら・・・

石田 俊正

いやな受験勉強を、「大学に入ったらこれをしよう。あれをしよう。」と考えて耐えてきた人も多いだろう。また、「大学に入ったら思いっきり遊んでやる。」と考えている人もいだろう。「大学に入ったら本をたくさん読もう。」と考えている人はあまりいないかもしれない。（図書館の人に怒られるかな。）残念ながら、思っていたことの全部が実現できるわけではなさそうだとすることがだんだんとわかってくる。

それでもけっこう時間はある。そこで、図書館の登場である。図書館には70万冊の本がある。といっても、ふうん、と思うだけでうれしくもないかもしれない。（「本、嫌い」の人は、アレルギーで体がかゆくなるかもしれない。）しかし、図書館には、まだまだ少ないが、約400本のビデオもある。もちろん、大学であるから、アダルトは置いてない。だが、興味のもてるものもあるはずである。一度のぞいてみてはどうだろうか。そして、図書館でみたビデオ（街のレンタルビデオでもいいよ）や家でみたテレビ、町でみた映画で見たことやテーマがおもしろかったらぜひ関係する本を手にとってみてほしい。

テレビもそうだが、映像というのは人に強い印象を与えるという点では、本や新聞よりはるかに優れている。このごろ「やらせ」というのが、問題になっているが、「やらせ」でなくても、強い印象を与えた映像が一人歩きしてしまうこともある。いうまでもなく、物事の本質が、その強い印象だけでとらえられるわけではない。そういうところを本なり新聞（もちろん、新聞も図書館にいろいろそろっている）なりが補ってくれる。

また、活字大好き人間の人も中にはいるだろう。そういう人の頭の中では、「活字になっていること＝本当のこと」という式が成り立っていることがある。もちろん、この式は、成り立たないのだから、いろいろな情報を取りこんで自分で考えるというのが大切だろう。

図書館というと「本がたくさんあって、レポートや卒業研究で利用するところ」というイメージがあるかもしれないが、自分で考えたり、感じたりする助けにも図書館を利用してほしい。自分の専門の勉強よりも長い目では役に立つだろうから。

（教養部・化学）

不良教員の誓い

根本 猛

こういうことを書くとほかの先生から叱られそうだが、私は4年前教員になったとき、ひとつだけ誓いを立てた。「自分が学生だったころを忘れない先生になろう」と。(同じように7年前父親になったとき、ひとつだけ誓いを立てた。「自分が子どもだったころを忘れない親になろう」と)

どういうことかという、自分がかつてされて厭な思いをしたことは、できるだけしないようにしよう。反対に、してもらってうれしかったことは積極的にしよう。

子どもや学生だったころ、私が厭だったことのひとつに読書感想文がある。どうして読みたくもない本を読まされて、そのうえ、そのまとめまで書かなければならないのか。私は、若者の本離れに、あの小・中学校時代の読書感想文は多大の貢献をしているのではないかという偏見をもっている。だから、授業などで、学生諸君に有益な本を薦めることはあっても、「読みなさい」とか、まして「レポートを出しなさい」とはいわない。こういう薦め方では、99%の学生はその本を読まないだろう。それでも良い。強制されて百人の学生が読むより、一人の学生が自主的に読むほうが尊いと思っているから。

私は、せっかく大学に入学したのだから、学生諸君には大いに本を読んで勉強してもらいたいと思っている。しかし、学生生活は勉強ばかりではないとも思う。だから、他人の迷惑にならないければ、勉強を怠ける学生に「勉強しなさい」という気はない。だいたい、他から強制されてやる勉強なんて意味がない。

閑話休題。私は、ここの人文学部にいるとき、奇妙な因縁で、法経短大のT先生にゼミの指導教官として1年間お世話になった。先生の研究室をときどきおたずねすると、研究室にはスポーツ新聞や野球のスパイク、グラブなどが散らかっていた。その研究室を私は現在使っている。同僚や学生が私の研究室を汚いと批判するときには、私の恩師であり前任者であるT先生の部屋はこんなものではなかったと抗弁することになっている。

いつか将来、「N先生の研究室はもっと散らかっていた」という文章が「図書館通信」か「静大だより」にでも載る日を夢見ている。

(法経短期大学部・憲法)

偶 感 愚 考

諏訪田 清

斎藤秀三郎という優れた英語学者がいた。彼は数々の名著を物し、そのなかの Practical English Grammar はハーバード大学で教科書として使われたという。また、『前置詞大完』13巻によってノーベル賞候補に挙げられたとのことである(詳しくは『斎藤秀三郎伝』を読みたい。ただ残念なことにこの本は本学の図書館にはない)。しかし、斎藤秀

三郎という名前を聞いたとき、彼の『熟語本位英和中辞典』が真っ先に思い浮かんでくる人は多いのではなかろうか。この辞典は今でも依然としてとても素晴らしいもののようだ。その一端は、柳瀬尚紀という人の「私のつくってみたい辞書」（岩波新書『辞書を語る』所収）で知ることができる。

一個人によって作られた外国語辞典のなかでこれほどまでに不朽の名著として高い評価を得ているものは他にあるまい。加えて斎藤秀三郎は外国へ一度も行ったことがない、日本で勉強した学者であった。

最近では外国へ行く人がとても多くなった。ただし、斎藤秀三郎のような語学力と学識の持ち主はそう多くはないだろう。関口存男というドイツ語学者が慨嘆しているところによれば、わかるのは日常会話のみで、外人同志のむづかしい話の間に入ってしまって全く相手にされず、「まるで落語家がオペラの役を引きうけたような恰好になる」という「国辱」的な人が昔はかなりいたということだ。芥川龍之介が彼の作品で言わせているように、凡人にとっては、「人生は一行のボオドレエルにも若かない」のであろうが、膨大な本を蔵する図書館の雰囲気を感じ、「精神的水準と文化人としての水準だけはせめて西洋人に笑われないだけの日本人」（関口存男）になる努力は怠らないようにしたいものである。

（人文学部・独語学）

読書とデート：大学に退屈した諸君のために

村 越 真

大学は学問の府である。だが、昨今そんなことを本気で考えている学生さんは1%にも満たないだろう。学問への情熱なんてこれっぽっちも持ち合わせていない諸君は、「大学ってなんて暇なんだろう」と思うに違いない。確かに語学や自然科学系の科目は大変ではあるが、要領のよい諸君なら、試験前にチョコチョコと勉強すれば、単位をとることなんて、朝飯前のはずである。基本的に大学は暇で退屈なところなのである。

問題はその暇をどうやって過ごすかである。大学教官は、その暇や退屈さを一生の生活のリズムとして生きようと心に決めた人種なので、それぞれに暇や退屈とつきあうノウハウをもっている。私の場合、それは本を読むこと、そしてデートである。

知り合いの信州大学教官の提唱する年間100冊本を読む会（Dokusho One Hundred Club：略称DOHC）の会員を自称している。読書は量ではない。だが、100冊という大きくて、具体的な目標を設定することで、本を読まなくちゃという気分について追いつかれない。好きな本や手近にある本だけではとても100冊に到達しない。勢い読書の幅は広がる。思わず面白い本を発見した時の喜びは、気のあう友人を得た時の喜びに等しい。

100回デートをする会（Date One Hundred Club）を主宰している。こちらでも略称はDOHCである。さすがに1年で100回のデートは大変なので、期限は定めていない。デートの相手を異性と限る必要はないが、延べ100人の人々と会って、それぞれに知的に刺激的なおしゃべりをするのである。同性でも異性でも、対等な存在としてコミュニケーションを楽しむ。相手の楽しめるように自分のアイデアを話し、そして相手の話も楽しく聞く。諸君の人間としての魅力と教養が問われ、そして磨かれるのである。残念ながら（？）妻子持

私の私は、これをアカデミックな不倫と呼んで楽しんでいる。その名前の由来と意味については生物学のホーキングとも言えるR. ドーキンスの「利己的な遺伝子」中の「ミーム」の章を参照してほしい。このような本に出会うこともまた、学生時代の読書の大きな楽しみである。

(教育学部・体育学)

学 生 と テ ス ト

宮 川 達 夫

本を読むことは楽しい、そして勉強も、なんて書くと、マンガ世代はきっとそんなバカな、きれいごとをいってなんて思うにちがいない。しかしちょっと待って欲しい。テストがあるから勉強するのがいやになるのである。マンガだってテストをしたらきっと嫌になるに決まっている。毎日一冊を宿題にして感想文を書かず、そしてこの作者の考えは次の設問のどれにあたるか、という類のどれをとっても正解に思え、しかし唯一つしか正解でない今の入試のようなことをしたら、マンガはたちまちきらいになるにちがいない。テストが勉強の邪魔をしているのである。学生諸君の身になってみれば自分が本当に読みたい、勉強したいものでなく半ば強制的に与えられるのだから。しかしつまらないと思う勉強も実はかなり有効なのである。人間の脳細胞のネットワークは君達の年代迄が最高で、あとはこわれるだけである。音感とか言語能力は幼児時代に完成してしまうし、数学とか物理という類は君達の年代を過ぎると勉強の効率が大変落ちる。社会に出て年をとって必要になったからと勉強を初めても、基礎ができていないとだめなのである。教師達は自分の苦い経験からそれをよく知っているから、君達に必要な学科を厳しく選択して教えているわけで、特に必修科目は教える方も一生懸命で君達の脳のネットワークの生長に努力しているのである。本来本を読むのは楽しいし勉強する事も楽しいことは、4年の卒論の学生諸君のいきいきとした勉強ぶりをみればよくわかる。テストがないからである。テストは採点する方も嫌なものである。問題は必要最低限これだけの知識はネットワークに入れて欲しいという願いをこめて出しているので、できているとうれしいが、白紙に近い答案をみるのはつらい。学生が新入生から4年の卒研を修了し社会に出て行く、又さらに大学院に進学、修了という過程を見ていると、人生の成長の最高のグラジェントをまの当りにみて感動を覚えるほどで、教師というのものなかなかいい商売だなと感じるのだけど、学年の最後にはテストがある。学生がいや、教師もいやなら止めればよいようなものだけど、そうはいかない。テストがないと勉強しないので必要最低限のネットワークができないからである。

そこでテストの方法も色々試みてみた。教科書・ノートを持ち込んでも良いというのは、試験のときになって初めて勉強を始めるからだめ、カンニングペーパーを作って持ち込んで良いというのは、カンニングペーパーを作るのにものすごいエネルギーをそそいで、こんなにすごい立派なカンニングペーパーを作るなら自分の脳のネットワークに書き込んだ方がよ

っぽど有益だろうと思い、これも止めた。

近所の喫茶店に行ってコーヒーを飲みながら答案を書いてもいい、わからなければ友人に教わっても良いがその代わり教える方は相手が自分で答案を書けるようになる迄教えることが条件で、まる写しの場合はカンニングとみなされ、両方とも単位を落すというのでもいいが、浜松キャンパスの周りにはおいしいコーヒーを飲ませる所がないからこれもだめか。試験時間も一日がかり、途中で食事に行ったり、碁を打っても良い、その代わり答案をもって行くと口頭試問があり、解答の原案を作った奴もあまりわかっていないとボロを出し単位を落すが、教わってもわかった者は単位が通るというのでもいいかな。いずれにせよテストが勉強の邪魔にならぬようこれからも試行錯誤をしてみたい。

(工学部・光電機械工学)

《新人生へ》ある聖書“木を植えた人”について

大 村 寛

題名の書“木を植えた人”には、「南フランスの不毛に近い荒地に、50才をすぎた質朴で孤独な農夫（エルゼアール・ブフィエ）が、無私の心で約35年間休まず、カシの団栗、カバやブナの苗などを植え続け、森を蘇らせていく。」という状況が、二度の世界大戦を背景に、旅人の目を借りてノン・フィクション風に記述されている。約40年前の著述であるが、「自然のもどった森の中には、香りのあるそよ風や、水の流れる音などがあり、これらが人々に精神的な明るさを与えている。」という趣旨の描写は、今日の森林浴の考え方に近い。また、植林には土地個有の性質に適した樹種が選ばなければならないこと、樹木の導入が植物連鎖により生物相を回復させ得ること、森林に水環境の保全機能があること、自然の復旧には数10年の年月が必要なことなど、技術的な視点も記されており、大変に興味深い。

既に知られたことではあるが、1990年2月21日に朝日新聞の天声人語に感想が紹介されており、同名の短編映画は1987年にアカデミー賞を受けている。森林資源科学を学びたい学生のみならず、新入生諸君一般にも、森林の問題を考え、これに対処するための出発点として、是非とも一読されることを薦めたい。現在、書店で並べられているものに下記の二種類があり、各々に味わいがある。

1. ジャン・ジオノ著、原みち子訳：木を植えた人、こぐま社 1989年発行 B6版
ISBN4-7721-9066-6 : 忠実な訳であり、著者と原文について文学的な解説が詳しい。
2. ジャン・ジオノ著、フレデリック・バック絵、寺岡たかし訳：木を植えた男、あすなろ書房 1989年発行 A4版 ISBN4-7515-1431-8 : 訳者の解釈のもとに、重要な箇所だけが選ばれ、詩のように意識されている。また、内容に対応したスケッチ風の絵がついており、ビジュアルである。

(農学部・森林資源科学)

図書館利用の今昔

竹内 浩 昭

大学図書館には、かれこれ十数年お世話になっている。学部学生時代には、試験勉強やレポート作成などの参考図書探しによく図書館に通ったものである。いわゆる一般向け科学雑誌（『科学』、『遺伝』、『日経サイエンス』等）を読みあさったり、時には惰眠をむさぼるためにも利用させていただいた。大学院に進学した後は、実際に手がけている研究や興味深い研究に関係する論文・総説・雑誌記事など種々の文献を集めるために図書館に通った。教官になってからも、主にこの目的で図書館を利用している。

図書館の利用環境は、数年前まで決して満足のいくものではなかった。特に地方大学では蔵書数が少なく、分厚い蔵書目録をめくって学外の文献所在場所を探す作業や文献コピーを郵政省メールで取り寄せる手続きに多くの時間が費やされたことが一因かもしれない。

時代は変わって、今や世の中はニューメディア花盛り。わが静岡大学附属図書館でも、ビデオ、レーザーディスク、コンパクトディスク等ニューメディア資料が利用できる視聴覚コーナーやパソコン・CD-ROMを利用した文献検索システム、電子メールやFAXを利用した文献複写などの新しいサービスが提供されるようになってきた。図書閲覧や館外貸出など昔からあるサービスも着実に使い勝手がよくなってきている。また、館内の空調設備や照明設備も徐々に改善され、ますます快適な利用環境が整備されつつある。ぜひ有効に利用したいものである。

ついでながら、今時の図書館は直接出向いていかなくても利用できることもつけ加えておきたい。パソコンと情報処理センターを介せば、学内の研究室はもとより自宅からでもオンライン学内蔵書検索システムは利用可能なのである。ただし、今のところ利用できるサービス種と利用者はごく一部に限られてはいるが。今後の情報通信技術と図書館サービス精神の向上に期待したい。もちろん、利用者側の技術・精神の向上も要求される時代であることは言うまでもない。

（理学部・生物学）



“私 の ” 図 書 館

大学院教育学研究科国語教育専攻2年

佐藤 麻記子

教養部での2年、そして学部へ上がってまた2年。そのまま大学院に進んだ私は、今一つ、大学生から院生へという自分の立場の変化がピンとこなかった。そんな私が、大学院生になったんだなあと改めて実感したのは、初めて書庫に足を踏み入れた時だったように

思う。ひんやりとした空気と、年数のたった本が放つ特有の匂い。今まではなかなか手にとって見ることでできなかった和綴じの本や漢籍の影印本。そして、今まで読んだ本の中に典拠として挙げられていた数々の書物。自由に「本物」に触れることができる喜びに、暫くその場を立ち去り難く、知っている書名を見つけては、意味もなくパラパラとめくってみたりした。

「本物」に直接触れ、自分の目と手を動かしてその本の内容を読み取り理解していく——時間は少々かかるが、ある本から知識を吸収しようとする時、最も着実な方法の一つと言えるのではないだろうか。図書館でコピー機を利用する人はとても多い。私も随分お世話になっている人間の一人である。だからこそ、コピーは便利な反面、少々危険な面をも持っていると感じるのだ。必要な所だけをコピーし、アンダーラインなどを書き入れ、それをファイルに綴じたりすると、あたかもその内容を理解できたかのように錯覚してしまうのである。しかし、本当の理解というものは、実際に目と手を動かし、その内容を自分なりに整理し直してみても初めて得られるものなのではないだろうか。コピーが悪いと言うわけではない。自分でどう使いこなすかが問われるのだと思う。私達が、自分というフィルターを通して接する時初めて、「本物」は「本物」としての価値ある内容を与えてくれるのではないだろうか。

小学校から大学院まで、ずっと学生という立場にあった私には、いつも身近な所に自由に利用できる図書室、図書館があった。卒業を間近に控えた今、必要な時好きなだけ「本物」の本を手にとり、調べたいことを調べられる図書館が身近にあることの有難さを痛感している。大学に入りたての頃は、必要な本がなかなか見つからず、図書館の方にお世話になることも屢々であった。そんな私でもここ1・2年は、ようやく自分の専攻分野の本であれば、短時間でお目当てのものを捜し出すことができるようになった。やっと自分なりに図書館を使いこなすことができるようになってきたということだろうか。私の場合、そうやってきたのは大学院に入り、必要に迫られて図書館へ頻繁に足を運ぶようになってからである。何でもそうだが、ある事柄が「自分のもの」として身につくまでには、それなりの時間が必要だということだろう。今になって、教養部や学部の時もっと積極的に図書館に足を運び、「自分のもの」とする努力をしておくのだったと思うこと頻りである。

今春大学院を卒業すると、いよいよ学生という立場からも離れることとなり、「本物」の書物と出会う機会もなかなか得難いものとなりそうである。調べたいことが出てきた時、その欲求を満たしてくれる図書館を捜すことができるか、自分流に使いこなすことのできる図書館を身近に得ることができるか——。また一から出直しということになるが、これから行く先々、必要な時「本物」の本を手にするのできる「私の図書館」と言えるようなものを持続けていけたらと願っている。

図書館と上手くつきあうために

人文学部3年 加藤 健

初めて図書館に足を踏み入れたとき、高校までのそれをはるかに凌ぐ図書の量にきっと驚かされるでしょう。そして同時に、これから大学で難しいことを学んでいくのだと思うと頼もしくも思われるでしょう。おそらく大学に入学してから卒業するまでに必要とする

文献はすべて間に合うと思います。それくらい図書館には図書が充実しています。

図書館は大きく開架と閉架に分かれています。開架にはこれから専門分野を学んでいく学生にとって手助けとなる教科書的な図書が配架されています。一般教養で幅広い教養を身に付けたい人や、自分の専門外の世界を少し覗いてみたい人にとっても、開架図書は大いに役立つと思います。また、閉架はその名の通り閉じられており、一般学生は入ることができません。その未知なる閉架には、外国政府機関の刊行物から所々虫に食われた跡がある古文書に至るまで、ありとあらゆる書物が保管されていると言われています。それらは簡単な手続きをすれば誰でも閲覧することができます。

このように図書館にはどんな資料も文献も揃っており、卒論であれレポートであれ例えどこまで深く追求しても図書館は応えてくれるでしょう。

最後に、勉強に疲れたら5階のベランダに出てみましょう。昼中は碧く輝く駿河湾を、夜は街の夜景を楽しむことができます。

ライブラリー・ オリエンテーションのお知らせ

■ 図書館および資料の利用法 ＋ 書庫案内 (約30分)

◎ 4月13日(火) - 4月16日(金)

◎ 11:00～, 13:00～, 15:30～ / 入口ゲート横に集合

■ 利用者端末の利用法/静大蔵書の検索

◎ 4月19日(月) - 4月23日(金)

◎ 13:30-16:30, 随時 / 4階端末コーナー

■ CD-ROMの使用法

◎ 5月10日(月) - 5月14日(金)

◎ 13:30-16:30, 随時 / 4階端末コーナー